

Title	10世紀以降のアラビヤ語研究の歴史
Author(s)	池田, 修
Citation	大阪外国語大学学報. 22 p.35-p.49
Issue Date	1970-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80368
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

10世紀以降のアラビア語研究の歴史

池 田 修

The history of Arabic philology from 10th century up to the 19th century.

OSAMU Ikeda

This study is to observe the history of Arabic philology from H 4/10th century up to the 19th century, refering to the works of some of the important philologists.

Arabic philology developed on a broader basis during the second half of the 'Abbasid period. The philologists of the subsequent period did not make any choice between the theories initiated by the Baṣrans and Kufans any more, but they exploited either or both of them. They emulated, abridged and commented on the works of two schools. Thus they completed the codification of Arabic by the end of 11th century.

Arabic philology in the Arab World today is definitely indebted to them, and works of the noted grammarians such as al-Alfiyyah of Ibn Mālik (d 1274), al-Ajurrūmiyyah of Ibn Ajurrūm (d. 1322) and al-Mufaṣṣal of az-Zamakhsharī (d 1143) are still widely studied throughout the Arab World.

Arabic lexicography, on the other hand grew to compile the great dictionary of al-Jawharī (d 1002), aṣ-Ṣiḥāḥ which up to this day has remained the indispensable companion of the Arabic philologists.

It supplanted all the lexicographical efforts of the earlier scholars. The work contains 40,000 entries, arranged alphabetically according to the last radical of a word.

It was abridged, revised or enlarged by subsequent scholars. Thus, were compiled the famous lexicons, such as Lisān al-'Arab of Ibn Manẓūr (d 1311), Qāmūs al-Muḥit of al-Firūzābādī (d 1414) and the Tāj al-'arūs of az-Zabīdī (d 1790), which are used today in the West as well as in the East.

本稿ではイスラム歴4世紀/西歴10世紀以降のアラビア語研究の歴史を明らかにしてみたい。現代におけるアラビア語研究は、4/10～5/11世紀に完成した規範文法、および、この時期に相前後して完成した大辞典の編集と直接的な関係を保っており、文法学や辞書学の発生、および、バスラ、クーファを中心とする諸学派の形成、論争時代を経過したあとのこの時期の研究史を明らかにすることによって、アラビア語研究の一助としたい。

§1 イスラム歴4/西歴10世紀になると、バスラやクーファの諸学の中心地としての地位はは

っきりとゆらぎはじめる。両市に代って、バグダッドが、学問の中心地として発展して来たからである。カリフは、学問、学者に保護を加え、これを取巻く諸侯も、同じような行動に出た。よりよい生活、研究条件を求めて、学者達は、バグダッドへ集った。

しかし、やがて、アッバース体制が弱体化して、カリフの中央集権力が弱まり、各地の封臣が事実上の独立政権を手中のものとし、それぞれの所在する都市を、イスラーム諸学の中心地に仕立てあげるようになると、バグダッドの学問は、各地へ分散することになる。

アラビア語の研究も、バスラ、クーファのそれが、バグダッドへ引き継がれ、やがて、広範な地域へ拡散して行く。

バスラ、クーファ両学派の論争という側面からとらえられていた文法学も、バグダッドが研究の中心地となり、時が経過すると共に、両者の融合が進展し、いわゆるバグダッド学派なるものが徐々に形成されて行く。この過程によって、研究者達は、(イ)バスラ文法に依拠する者、(ロ)クーファ文法に依拠する者、(ハ)両派の折衷をはかる者に、色分けされている。これ等三群が、いわゆるバグダッド学派といわれるものの中に含まれているとするのが従来のとらえ方であった。

例えば Muḥammad 'abd al-mun'im 等は、バグダッド学派を、次のように整理している。¹⁾

①バスラ的手法によった学者

- | | |
|------------------------|-----------|
| (1) Az-zajjāji | H311/923 |
| (2) Ibn as-sarrāj | 316/928 |
| (3) Ibn durayd | 321/933 |
| (4) Abū 'alī aṣ-ṣaffār | 341/952 |
| (5) Mabrmān | 345/956 |
| (6) Niftawayh | 323/934—5 |
| (7) Ibn durustuwayh | 347/958 |

②クーファ的手法に依拠した学者

- | | |
|----------------------------|------------|
| (1) Al-ḥāmid | 305/917 |
| (2) Al-yazīdī | 310/922 |
| (3) Ibn-shuqayr | 317/929 |
| (4) Abū bakr ibn al-anbārī | 328/939—10 |

③折衷派

- | | |
|--------------------------|-----------|
| (1) Ibn qutayba | 276/889 |
| (2) Ibn kaysān | 299/911—2 |
| (3) Al-akḥfash al-aṣghar | 315/927 |
| (4) Ibn al-khayāt | 320/932 |
| (5) Az-zajjāji | 325/936—7 |
| (6) Al-wishā' | 325/936—7 |

このような学者層の分類は、Ibn an-nadīm 等の分類によったものであるが、④は Al-mubarrid²⁾ に直接師事した学者であり、バグダッドで育ったとはいえ、いわばバスラ学派である。⑤は、Tha'lab³⁾ の弟子達で、クーファ学派と見なして良い。従って、両派を折衷して、バグダッド学派を形成することになったのは、⑥に分類されている学者達である。この中でも、Ibn qutayba⁴⁾ は、その著作の一つ、'adab al-kātib (書記のアダブ) の内容からみても、Al-mubarrid と同様、バスラ的である。この著作自体、文法学とアダブ文学との一体化を示すものである。Kaysān をはじめ、⑦に分類されている学者達は、イスラム歴3世紀までのバスラ、クーファ両学派の研究成果を、選択的に、ないしは、無差別に、受け取り、「両派の混合」⁵⁾ を行ったのであるが、4世紀に入ると、次第に、「qiyās (尺度) を用いて、taqdir (類推) を行い、論理学を文法学に適用して、この規範化を完成させる」に致るのである。この方向は、明らかに、両派の混合期を通じて、バスラ学派の勝利を意味し、あるがままの言語現象をとらえようとしたクーファ文法学の敗北を物語る。

Ar-rummānīについて、kāna yamzaju n-naḥwa bi l-mantiqi (彼は、文法学に論理学を混合した)⁶⁾ と述べられているのは、kitāb Sibawayh を土台として、論理を貫いた Al-mubarrid の手法の完成が、およそ4世紀末に実現したことを示すものではないだろうか。即ち、この時期になって、kitāb Sibawayh を研究、解説を行った As-sirāfi (368/978) 'Alī ibn 'isā ar-rummānī (384/994), Abū 'alī al-fārisī (377/987), Ibn jinnī (392/1002) などを経て、文法学の規範化は、完成するのである。ここでは、東イスラム世界で注目すべき文法学者として、As-sirāfi, Khālawayh, Abū 'alī Al-fārisī, ar-rummānī, および Ibn jinnī について述べる。

一方辞書学的研究は、Ibn fāris (395/1004) とその弟子 Ibn 'abbād (385/995) の二人によって進められたが、5世紀以降辞書学はいちぢるしい発展をとげる。

また、4世紀の西イスラム世界における文法学者 Abū 'alī al-qālī (356/966~7) の存在も無視出来ないであろう。

△ Al-ḥasan ibn 'abd al-lāh as-sirāfi (368/978~9) は、イスラム歴270年頃の生れで、バグダッドにのぼり、コーラン、文法学、辞書学、法学などを学んだ。コーランは、Abū bakr ibn mujāhid に、辞書学は、Ibn durayd にそれぞれ教えられ、文法学は、この二人から学んだ。従って、バスラ的であったのだろう。彼は、バグダッドで法官となり、その As-rusāfa 地区にあったモスクで、50年間ハナフィー学派によるムフティーの地位にあった。彼の著作の内、最も有名なのは、sharḥ kitāb Sibawayh (Sibawayh の文法書解説) である。これは、Sibawayh の al-kitāb の解説書としては、最も権威のあるものとされている。⁷⁾

Abū 'alī al-fārisī など同時代の学者は、この解説書に心を奪われたと伝えられている。彼には、このほか、shawāhid Sibawayh (Sibawayh の例証解説), al-madkhal ilā kitāb Sibawayh (Sibawayh の文法書入間) などがあるが、彼が書いた akhbār an-naḥwiyyin al-baṣriyyin (バスラ文法学者列伝) は、古来、文法学者列伝 (ṭabaqāt an-naḥwiyyin) をものにした学者達の貴

重要な資料となっているもので、バスラ学派を知る上で、欠かせない文献である。⁸⁾

△ Abū 'abd al-lāh ibn khālawayh (370/980—1) は、ペルシャの Hamdhān 出身である。「コーランを Ibn mujāhid に学び、文法学とアダブを Ibn durayd, Niftawayh, Abū bakr ibn al-anbārī および Abū 'umar az-zāhid に学んだ。ハディースは, Muḥammad ibn mukhlid al-'aṭṭār その他から聞いた」とあり⁹⁾、又、「As-sirāfi に師事して、両学派を混合した (khalata l-madhhabayni)」¹⁰⁾と伝えられる。彼は、辞書学および、ハデースで一家をなし、メデナでは、ハディースを講じたこともある。

晩年は、アレツポで、ハムダーン王朝の宮殿に出入を許され、Sayf ad-daula¹¹⁾の被護を受け、詩人Al-mutanabbī としばしば論争した。

彼の著作のなかで、最も注目されるのは、kitāb laysa (非在存の書) である。laysa という書名が用いられているのは、この著作中の文章が、laysa fi kalāmi l-'arabi... illā... (... というものを除いては、アラブの言葉に... は存在しない) という表現法で、統一されているため、文法学に関する研究書である。

このほか彼は、10種余の著作を行っているが、そのほとんどは、文法学、辞書学、およびコーランに関するもので、i'rāb thalāthīn sūra (コーランの30の章の 'i'rāb 研究)¹²⁾も有名なものである。

△ Abū 'alī al-fārisī (377/987) は、当時、バグダッドにおいて、最大の文法学者と目されていた。彼の弟子達は、彼が「Al-mubarrid よりも博学だ」と絶賛していた¹³⁾

彼は、Az-zajjāj, Ibn as-sarrāj および Mabrmān など、Al-mubarrid の弟子達を師に持ち、彼等について kitāb Sibawayh を学んだのであろう。

彼の著作の中で、有名なものは伝わっていないが、語形論 (at-taṣrif) には、造詣が深く、弟子のAr-rummānī や、Ibn jinnī の著作にこれが反映されている。伝承によれば、彼は 'Aḍud ad-dawla¹⁴⁾のために、al-'iḍāḥ fi an-naḥw (文法明解)、at-takmila fi at-taṣrif (語形論の完成) の二書を著わし、前者の中で、例外を示す 'illā という辞詞のあとの名詞が対格になる説明 (古来7通りあるとされているが) の内、最も有力な説「'illā の意味を強よめるための先行動詞 'astathni (私は、それを例外とする) によるものであるとの説を展開した。これは、後に、As-suyūṭī 等によって、支持されている。

△ 'Alī ibn 'isā ar-rummānī (384/994) は、Al-ikhshidī とか、Al-warrāq という名でも知られている。彼は、アラビア語と文学にすぐれ、Al-fārisī や As-sirāfi の階層 (ṭabaqa) に属していた。H276年に生まれ、Az-zajjāj, Ibn as-sarrāj, および Ibn durayd などに学んだが、彼は、ムウタジラ派に属し、「文法学に論理学を混合した」のである。これは、バスラ学派の Al-mubarrid の手法を我々に憶い起させるものである。彼の論理学と文法学との混合におどろいた Al-fārisī は、「もし、文法学が Ar-rummānī の言うようなものであれば、我々のもっているものとそれとは全く関係ないし、もし文法等が我々の言っている通りのものであれば、Ar-rummā-

ni のやっているものは、それと全く関係がない」¹⁵⁾ とまで言ったと伝えられている。又、As-suyūṭī は、「文法学は、Al-fārisi の言う通りのものである。一体、何時、誰が、文法学を論理学と混合したものがあろうか。Al-khalil や、Sibawayh およびこの二人の同時代およびそれよりの者の著者の著作にそのようなものは全くない」¹⁶⁾ とまで述べている。しかし、筆者は、As-suyūṭī のこの説は事実をゆがめていると考えている。それは、Ar-rummāni がムウタジラ派に属していたし、エジプトの学者達は、「ギリシャの論理学」の影響を受けていたムウタジラ派の文法学を、実質的には受け継ぎながら、言葉の上では、異端視していたからである。

これは、20世紀初頭まで、見られた現象で、有名な Tā Hā Husayn の al-'ayyām II には、アズハルで、Al-mubarrid の al-kāmil が、「ムウタジラ派による異端の作」として、講読禁止処分を受けたことが述べられている。筆者は、事実上、4世紀の文法学は、「論理を貫く文法学」が風靡していたと考えている。文法学におけるムウタジラ派の勝利であり、文法の規範化の完成を意味するものである。

Ar-rummāni は、10余の作品を書いたが、ほとんどがコーランと文法学に関するもので、sharḥ Sibawayh (Sibawayh 解説) Sharḥ 'uṣūl ibn as-sarrāj (Ibn as-sarrāj の根本原理の解説)、Sharḥ al-'alif wa al-lām li Al-māzini (Al-māzini 定冠詞論解説) Sharḥ Aṣ-ṣifāt (修飾語の研究) などがふくまれている。

△ Abu al-faṭḥ 'uthmān ibn jinnī (392/1001—2) は、4世紀末を飾るにふさわしいアラビア語研究上の業績をあげている。彼は、モウスのモスクで文法を学んでいた時、たまたま Abū 'alī al-fārisi に出会い、これを機会に、語形論研究のため、40年間にわたり Al-fārisi の弟子になったといわれる。

Ibn jinnī は、バスラ学派の Ibn durayd による al-ishtiqāq (語原の書) 以来の語原研究の業績もあげている。師の死後、バグダッドで代って師となり、語形論を中心とした文法学の研究を行ったが、彼の人柄を伝える伝承に次のようなものがある。「彼は、詩人の Al-mutanabbī と、その詩を一行も読むことなく、文法上の問題で論議を吹きかけた。しかし Al-mutanabbī は、“この男の才能を、多くの人達は知らないのだ” と言った」という¹⁷⁾。

もっとも、彼の著書の中には、「Al-mutanabbī 詩集の解説」というものがあり、この伝承を信じがたいものになっている。

彼の著作のなかで注目されるのは、kitāb al-khaṣā'is fi 'ilm'usūl al-'arabiyya (アラビア語語根詳解)¹⁸⁾ という語根と派生文字の研究を中心としたものである。

この中で、語原を、小語原 (al-ishtiqāq al-aṣghar 又は aṣ-ṣaghīr) と大語原 (al-ishtiqāq al-akbar 又は al-kabīr) に分類している。前者は、同一語根が一定の配列順を基礎とする派生語群の体系をさす。例えば、salam (平和) silm (平和) salima (安全であった) yaslamu (安全になる) sālim (安全な) などいずれも「S. L. M」を語根とする語群の体系がこれに当る。これに対して、後者は、同一語根のあらゆる組合せ (三子音根の場合は、6通りの組合せが可能) によ

って生ずる語群が、同一の意味を示すものことで、例えば、K L M, K M L, M K L, M L K, L K M, L M K を語根とする語が共通の意味を示すというような場合をいう。

彼の著作の中には、このほか、kitāb sirr aṣ-ṣinā'a wa-asrār al-balāgha (叙実の秘法と修辭の秘密)¹⁹⁾、al-munṣif, sharḥ kitāb at-taṣrif li Abi 'uthmān al-māzinī (Al-māzinī の語形論論考)²⁰⁾、および、mukhtaṣar at-taṣrif al-mulūki (語形論概要)²¹⁾ があり、あとの二著において、従来の Al-māzinī における ṣarf 論と、自己の ṣarf 論の展開を説いている。

彼が、ギリシャ文法に精通しており、言語の根源を、tawāḍu' (有姿) と Iṣtilāḥ (規範) のうち、どちらかと云えば後者に求めたがっていたと伝えられるのは、Ar-rummānī の文法学と論理学との混合による文法学の規範化の伝承と考え合せ、4 世紀末のアラビア語研究の様子を知る上で参考になるものである。

△ Abū 'alī al-qālī (356/966—7) は、4 世紀における西イスラム世界の特筆すべき文法学者である。彼は、アルメニアのカリカラ (qālī qalā) に、H 282 年に生まれ、303 年にバグダッドへ行き、ここで、Ibn durustuwayh, Az-zajjāj, Al-akhfash aṣ-ṣaghīr, Niftawayh, Ibn durayd, Ibn as-sarrāj, Ibn al-anbārī, Ibn abī al-azhar, Ibn shuqayr, など両派の学者から文法学を学んだ。特に Ibn durayd との関係が深く、バスラ文法に傾き、Az-zubaydī は、「彼は、バスラ文法に関しては、誰よりもよく知っており、言葉を最も多く記憶し、ジャーヒリーヤの詩の口述者として第一人者であった」と伝えている。

328 年にバグダッドを出て、330 年にコルドバ (qurṭuba) に移り、ここの大モスクで約 25 年間アラビア語と伝承学を教えた。

彼は、西イスラム世界に最初に文法学を伝えた学者であるが、自分の講義したところをまとめて、al-amālī (口伝学)²²⁾ という著作とした。

この書物は、Al-mubarrid の al-kāmil と好一対をなすもので、文法学と、アダブとを混合させた作品である。

尚彼の弟子の中で有名なのは、al-istidrāq 'alā Sibawayh (Sibawayh への補正)²³⁾ をものにした Abū bakr az-zubaydī (379/989) で、彼は、この中で、Sibawayh がふれていない 80 の語形について論じているといわれる。

△ Isma'īl Ibn 'abbād (385/995) は、ブーヤ朝の宰相 (wazīr) であった。ペルシャ人の血統を持つブーヤ朝は、320/932—448/1056—7 の内、アッバース朝カリフの所在地たるバグダッドで実質的な政権をにぎり、amīr al-umara' (大守の長) という称号を用いた。ペルシャの大部分はブーヤ朝の実質的支配下に入り、彼等は、Mu'izz ad-dawla, 'Aḍud ad-dawla, 'Izz ad-dawla, Fakhr ad-dawla, Sayf ad-dawla 等、dawla (王朝) という名をつけて知られている。彼等は、学問や学者を大切に、とりわけペルシャの rayy の宮殿においては、そうであった。すぐれた学者や詩人達が、彼等の被護のもとに活躍していたが、その一人に、Isma'īl ibn 'abbād も居た。彼はブーヤ朝の宰相となり、幾人もの Amīr に伝えたが、Mu'ayyid ad-dawla から aṣ-ṣāhib (友

人)の称号を贈られ、Aṣ-ṣāhib ibn 'abbād という名で知られるようになった。ブーヤ朝のAmir 達が学問をよく保護したのは、この宰相に負うところが大きいといわれる。その彼自身が当時最大の学者であった。彼は、出張する時は、きまって道中読む本を運ぶために30頭のラクダを必要とした。しかし、Al-iṣfahānī の有名な kitāb al-aghānī (歌の書)を入手してからは、これだけで満足するようになった。

又、彼は、サーマーン朝の Nūḥ ibn maṣṣūr (ホラリーンの支配者Nuḥ II 世のこと)が、相当の条件で、彼を宰相として、迎えたいとの密書をよこしたのに対して、彼の蔵書を運ぶだけでも、400頭のラクダが必要だという返事を出して、上手に断ったという²⁴⁾。彼についてのこれ等の逸話は有名であるが、彼は、とも角、ブーヤ朝において、政治家としても学者としても、第一級の人物であったことを物語るものであろう。

彼の業績の内、最大のものは、al-muḥīt (太洋、取り巻くものの意)という辞書である。いわば「大言海」ともいうべきものだろう。これ以後、アラビア語の辞書のことを、al-muḥītという語で呼ぶようになるが、それは、アラビア語が、その語彙の豊かさと意味の深さにおいて、地球を取り巻く大洋にも比せられるからである。

△ Abu al-ḥusayn aḥmad ibn fāris (395/1004~5) は、Ibn 'abbād の師であるが、彼は、ブーヤ朝の生んだすぐれたクーファ学派の流儀に従う学者であった。彼は最初Hamdhān で、ブーヤ朝のアミールに教えていたのであるが、Fakhr ad-dawla は、彼をRayyに招き、息子Abū ṭālib の家庭教師とした。ここで、彼は、Ibn 'abbād という弟子に恵まれたのである。

Ibn fāris には、10余の著書があるが、主要なのは、al-mujmal li-al-lughā (言語概説)とい現代的な配列法による辞書と、fiqh al-lughā (言語の掟)という二書である。後者は、文法書で、後世 aṣ-ṣāhibī という名で知られている。それは、弟子の Aṣ-ṣāhib ibn 'abbād が、一歩先んじて他界し、Ibn fāris は、これを、弟子への献本としているからである。

又、彼の書物の中には、al-intiṣār li-Tha'lab (Tha'lab の勝利)というものがあげられているが、これは、彼が、クーファ文法学へ心酔していたことをよく物語るものである。

§ 2

イスラム歴5/西歴11世紀のアラビア語の研究は、今日のアラブ世界におけるアラビア語研究に直接的なかかわりを持つようになる。バスラ、クーファ、およびバグダッドなど4世紀までの文法学の研究成果は、5世紀に入ると、(イ)項目の整理、整然とした秩序立てが行なわれ、(ロ)文体、用語、の明解化、明白化に主眼をおく、教科書の編集に利用され、これを更に記憶しやすいようにするために詩に作り変えることまで行なわれた。Az-zamakhshari, Ibn al-ḥājib, Radī ad-dīn al-astarabāzī, Ibn mālik, Ibn ḥishām al-anṣārī などが相次いで、基本的な文法学の教科書を作成したが、これ等は、4世紀に完成した規範的文法学にほとんど100%依拠するものである。

一方辞書学の分野では、今日でも使用されるいわゆる大辞典の編集が、黄金時代を迎える。Al-jawhari (aṣ-ṣiḥaḥ 作成)、Ibn manzūr (lisān al-'arab)、Ibn sīdah (al-mukhaṣṣaṣ)、Al-firū-

zābādī (al-qāmūs al-muḥit), Az-zabidī (Tāj al-'arūs) などが、相次いで世に出た。

以下、イスラム歴5世紀から、近代に致るまでの主要な文法学者をまず取りあげる。

△ Abu al-qāsim az-zamakhsharī (538/1143—4) の出現によって、文法学は、いわゆる教科書時代を迎えることになる。彼以後の文法学は、従来の文法学研究の遺産を、出来るだけ、包括的に、体系的に、しかも、単純、明解にして、基本的な教科書を作成するのに主眼を置くようになり、独創性は、みられなくなる。

彼は、中央アジアの khuwārizm に、H 497 年に生まれ、バグダッドを数回訪門して、Abu al-ḥasan an-nisābūrī や Abū muḍirr al-iṣfahānī などに師事した。メッカに住居を構えたこともあるところから、jār al-lāh (神の隣人) と呼ばれた。又、fakhr khuwārizm (フワーリズムの誇り) というようなニックネームも付けられた。

彼の著書の中でも重要なのは、コーランの注釈書として権威がある al-kashshāf fi at-tafsir および、文法学の al-mufaṣṣal (詳解又は諸章の書)²⁵⁾ という書物である。

このほか、Muqaddima al-adab (アダブ 文学序説) という、アラビア語—ペルシャ語辞典、Asās al-balāgha (修辞の基礎) という美辞麗句集、al-fā'iḳ (優美) という伝承学上の非日常語 (al-gharib) の解説書などがある。

彼の文法書 al-mufaṣṣal という書物は、Sibawayh の al-kitāb にもられている項目のすべてを論じながら、しかも簡潔にして要領を得た教科書であり、an-namūdḥaj (見本) というペルシャ語の著書は、al-mufaṣṣal の抜粋本である。

al-mufaṣṣal には、その後、種々の解説が加えられ、拡充された。こうして、この書は、アラビア語の文法学にみられる多岐にわたる問題の解説を加えることによって、規範文法の手本となった。アレppoの文法学者 Abu al-buqā ibn ya'ish (643/1245—6) は、sharḥ al-mufaṣṣal (al-mufaṣṣal の解説)²⁶⁾ を完成したが、それ以来、今日までの文法の模範的テキストと見なされるに致り、従来あった文法学の著書は、かえり見られなくなった。Sibawayh の al-kitāb でさえ、少数の学者を除き、もはや研究されない状態になった。

△ Ibn al-ḥājib (646/1248) は、クルド人の血を引く学者で、統語論 (an-naḥw) に関する al-kāfiya (完全文法) という著作と、語形論 (aṣ-ṣarf) に関する ash-shāfiya (確定文法) という著作を残した。これは、Az-zamakhsharī の al-mufaṣṣal において、an-naḥw と aṣ-ṣarf が混然としているのを、分離したものであるが、4世紀における Ibn jinnī の伝統を生かしたものである。この二書は、詩の形式で書かれていて、難解なため、弟子の Radī ad-dīn al-astarābādī (688/1248) によって sharḥ al-kāfiya²⁷⁾ (al-kāfiya の解説) が書かれ、又 'abd al-qādir ibn 'umar al-baghdādī (1093/1682) によって、sharḥ shāfiya Ibn ḥājib ma'a sharḥ shawāhidi (Ibn ḥājib の shāfiya 解説と、その例証解説)²⁸⁾ が書かれた。

文法書に限らず当時、いろいろな学問が、記憶しやすいように、詩の形式に書き直されたが、このような詩は、教訓詩 (shi'r at-ta'lim) といわれ、通常、ラジャズ調、タウール調、等によ

るものが多かった。

△ Jamāl ad-dīn ibn mālīk (672/1273—4) は、Ibn ya'īsh に師事して、al-mufaṣṣal を学び、Ibn ḥājib 同様、al-mufaṣṣal の詩作を行った。しかし彼の場合は、an-naḥw と、aṣ-ṣarf を分けていなかった。彼が詩作したものは、1001行に及ぶ。ラジズ調の詩となったため、al-alfiyya (千行の)²⁰⁾ という名称で知られている。

アラブ世界で、今日でも重視されるこの al-alfiyya は、簡潔で、記憶はしやすいが詩であるために、無理に簡潔にしたきらいもあり、どうしても、解説書が必要である。この要求に充分応えているのが、Bahā' ad-dīn 'abd al-lāh ibn 'aqīl (769/1367—8) による sharḥ Ibn 'aqīl (Ibn 'aqīl による al-alfiyya の解説)³⁰⁾ である。

Ibn mālīk は、この al-alfiyya の冒頭の詩で、これの完全さを誇って、次のように詠っている。

これは怒りなき喜びを求めるに値するもの、

これは、Ibn mu'ty の al-alfiyya を凌駕するもの、

と、しかし、解説によると、ここまで詠んで眠ったところ、夢の中に Ibn mu'ty が現われ、彼を激しく批難したので、翌朝目がさめると、早速、

しかし、Ibn mu'ty は、開拓者なる故に、

優先の利を取るべき者、

彼も、報恩に値する。

神よ、余と彼に、あの世で、

豊かな御恵を垂れ給え。

と詠いついだといわれる。

△ Abu al-ḥajjāj yūsuf ibn sulaymān al-a'lam aṣḥ-shaṭamārī (476/1088—4) は、ジャーヒリーヤの詩集 al-mu'allaqāt の解説の他に、sharḥ aṣḥ-shawāhid (例証の解説) という文法書を残している。これは、Sibawayh が al-kitāb に用いている文法上の例証詩の解説書である。sharḥ aṣḥ-shawāhid とか sh-shurūḥ al-abyāt (詩の解説) というような名称で、多くの学者が kitāb Sibawayh の例証を説いているが、今判明しているだけでも、18人の学者がこれを手がけている。

△ Ibn ajurrum aṣ-ṣanhājī (723/1323) は、文法学の概説書 al-ajurrumiyya という詩形式の著作を行った。この書物に用いられている手法は、Ibn mālīk の al-alfiyya のそれであり、文法学上の基本的な問題を、一層簡潔にまとめている。今日でも、広くテキストとして、用いられている。

△ Abū muḥammad 'abd al-lāh jamāl ad-dīn ibn ḥishām al-anṣārī (761/1359) は、708年カイロに生まれた。彼は、約29種の著作をものにしてはいるが、なかでも、mughnī al-labīb (理解を豊かにするもの)³¹⁾ および shudhūr adh-dhahab (金片集)³²⁾ の二著は、特に有名な文法学

書で、これをもって、エジプト学派の手本とするのが通例である³³⁾。

Ibn khaldūn が、「我々がマグレブに居た時、いつも、エジプトに Ibn hishām という Sibawayh よりすぐれたアラビア語学者が現われた。」³⁴⁾と語ったと伝えられているが、Ibn hishām の上記二著をみると、バスラ文法を柱としながらも、比較的よく先行学者の所説を論評していることがわかる。特に、mughnī al-labīb ではエジプト学派の、バスラ、クーファ、バグダッド諸学者への批判がよく展開されている。

△ ‘Abd al-qādir ibn ‘umar al-baghdādī (1093/1682) は、Ibn ḥājib の語形論を扱った詩形式の ash-shāfiya の shārḥ (解説) を残しているが、このほか、khizāna al-adab wa-lubb lubāb lisān al-‘arab (アダブ文学の宝庫と、アラビア語の要点) という著書を残している。この書物は、元々文法上の例証詩の解説を目的としたものであったが、著者は、それぞれの例証詩の作者や、その伝記などを研究し、文字通りアダブ文学の宝庫と言うにふさわしい作品にしている。この作品は、Al-mubarrid の al-kāmil や、Al-qālī の al-amālī と同種の「文学と文法学の混合」をはかったものであるが、文献学的にみても価値が高いものである。それは、彼が文学について広範な知識を有し、すでに失なわれている書物についてもふれており、今まで他で求めることが出来なかった古代の詩を明るみに出すなどしているからである。

△ Germanos farḥāt (1145/1732) は、マロン派のキリスト教徒で、baḥṭh al-maṭālib wa-ḥaṭṭ aṭ-ṭālib (問題の調査と学者の休息) という文法書を著している。これは、近代アラビア語研究の先駆をなすものであるが、内容的には、Ibn hishām, Ibn mālik, Ibn ḥājib など、いわば「教科書」学者達の著書を資料としたキリスト教徒の手になる文法書である。

△ Buṭrus al-bustānī (1300/1882—3) は、辞書学研究に加えて、文法学に関しても、造詣が深く、miṣbah aṭ-ṭālib fī baḥṭh al-maṭālib (問題の調査に関する学者の灯) をベイルートで、1854年に出版し、さらに miftāḥ al-miṣbah fī aṣ-ṣarf wa-an-naḥw li al-madāris (学校用の文法学の灯のカギ) というテキストを1862年に出版した。いずれも、Germanos farḥātの文法書に依拠したものである。

△ Sa‘id al-khūrī ash-sharṭūnī (1330/1911—2) は、aqrab al-mawārid ilā afṣaḥ al-‘arabiyya wa-sh-shawāhid (正則アラビア語と、言語的変則の近似例証) という3巻物の著作を発表した。このなかで、彼は、主として、有益な文学上の引用、変則的な例証をとりあげている。

伝統的な語原研究を受継いだのは、Aḥmad efendī fāris ash-shidyāq (1300/1882—3) である。彼は、イスタンブールで有名な哲学的雑誌 al-jawā‘ib (返答書) を発行したが、多岐にわたる文学活動を行い、著作の中には、Sirr al-layālī fī al-qalb wa-al-ibdāl (音韻転換と音声変化に関する夜々の秘事) は、類似子音による語彙のまとめや、同じ子音の異順による同一意義語群などを紹介しているが、これは、明らかに Ibn jinnī の大語原、小語原の分類の紹介である。

Nāṣif al-yāziji (1288/1871) は、Germanos farḥāt を更に要約して、faṣl al-khitāb fī ‘uṣūl lughā al-i‘rāb (ベイルート1836) を発表している。

これ等バイルートの学者達の著書は、ヨーロッパのアラビア語研究の参考に供されているが、William Write も、Arabic Grammar 第3版の二版巻頭言で、Ibn mālīk, Az-zamakhshārī などと共に、Germanos farḥāt や Buṭrus al-bustānīなどを参考にしたとのべている。

尚、このような4世紀以降の規範的な文法学は、現在、アラブにおける文法学の主流をなすものであり、筆者は、dār al-'ulūm の元教授 'abbās ḥasan による an-naḥw al-wāfī (4巻: dār al-ma'ārif 1964年) が、Ibn mārīk の al-alfiyya と対比しながら編集されているのは、その代的な例であると注目している。

§ 3

イスラム歴5世紀以降、アラビア語の辞書学は、大辞典時代を迎えるが、文法学同様、現代のアラビア語辞書学と直接的なかわりをもつ重要な辞書が編集されているので、その歴史を明らかにしておきたい。

アラビア語の辞書学的研究は、当初「馬」とか「雨」とかの如く、項目別の語彙の蒐集、解説にはじまり、多くの項目別語彙集の結集による大辞典の完成から、これのアルファベット順の辞典編集へと発展して行く。この中にあって、Al-khalīl ibn 'aḥmad³⁵⁾ は、調音点を基準とする語の配列を行った辞書、kitāb al-'ayn³⁶⁾ を完成しているが、サンスクリット辞書学との関連を示唆する。5世紀の辞書学研究は、おおむね最後の発展段階に達したとみてよい。

即ち、Al-jawharī による aṣ-ṣiḥāḥ, Ibn manzūr による liṣān al-'arab, Ibn ṣidāh による al-mukhaṣṣas, Al-firūzābādī による al-qāmūs al-muḥiṭ, Az-zabīdī による Tāj al-'arūs などの大辞典が相次いで完成したのである。

△ Abū naṣr ismā'il al-jawharī (393/1002~3) は、従来みられなかった大辞典を完成した。

彼は、トルキスタンの Fārāb の生まれである。有名な哲学者 Abū naṣr al-fārābī や、言語学者 Abū ibrahīm al-fārābī (350/961~2) と同じ土地に生まれているが、後者は、Al-jawharī の伯父に当り、diwān al-adab (アダブ文学抄) を著わしている。

Al-jawharī はイラクで、Abū 'alī al-fārisī や As-sirāfī などに師事して、文法学を学んだあと、ヒジャース地方を旅行し、Rabī'a とか Muḍar というベドウン居住区で生活した。後に Nī-sābūr に帰って、著作活動をはじめた。

彼の主著 Tāj al-luḡha wa-ṣiḥāḥ al-'arabiyya (言語の王冠とアラビア語の正則性) は、普通略して aṣ-ṣiḥāḥ とよばれており、先行学者や彼自身の所説を書き込んだ巨大な辞典である。

Aṣ-ṣiḥāḥ で注目されるのは、単語が語末子音(語根の)によって配列されている。次いで終りから二番目の語根をアルファベット順に配列している。例えば、b の項目をみると、abab, atab, adab, adhab, arab. . . のような語順になっている。

このような配列は、のちのアラビア語の辞書においても採用されるようになったもので、脚韻をそろえるために、同じ語末音の単語を探すのに便利なものとなっており、辞書学が、詩作の必要上発達したとの解釈も成り立ち得る。

Al-jawhari は、この辞書を *q* の項目まで書き終えたところで、屋根から落ちて死亡した。彼は、*aṣ-ṣiḥāḥ* を *qād* の項まで書き終えた時、*Nisābūr* の古いモスクへ行き、その屋根に登って「皆さん、私は、余人のなさなかった仕事をした。今一つ、誰一人しなかったことを実行してみせませう」と言って、扉を二枚両脇にしばりつけ、高所から飛行を試みたが落ちて死んだと伝えられている。そこで、彼の弟子 *Ibrāhīm al-warrāq* は、師が生前集めていた資料を基にして、これを完成した³⁷⁾。古来 *ṣaḥaḥ* と *ṣiḥāḥ* とよばれている。

この辞書は、古典的評価を受け、しばしば注釈が加えられ、補遺がつけられたりして、広範な辞書学文学の起点となった。

△ *Muḥammad ibn mukarram ibn manzūr* (711/1311~2) は、*Al-jawhari* の *aṣ-ṣiḥāḥ* およびその *ḥawāshī* (脚注) 等を取りまとめて、*lisān al-'arab* (アラブ人の言語) という 20 巻に及ぶ大辞典を完成した。ペイルート, 1955/6. 15巻. ブーラック H1300~1308. 20巻がある。

△ 西イスラム世界では、ムルシア (*mursiya*) の *Abu al-ḥasan aḍ-ḍarir abi ibn aḥmad ibn sidah* (458/1065~6) が、*Khalil* の手法に従う *muḥkam* という注目すべき辞書と併行して *al-mukhaṣṣas fi al-luḡa* (言語専門書) という 17 巻の辞書を著わした³⁸⁾。

この辞書は、*aṣ-ṣiḥāḥ lisān al-'arab* とことなり、項目別の大辞典であって、この意味では、古典期の辞書学の記念碑である。

彼は、このほか論理学に関するものや、*al-ḥamāsa* 詩集の解説などを行っているが、*al-mukhaṣṣas* の著者として特に有名である。

△ *Majid ad-dīn al-firūzābādī* (817/1414~5) は、アラビア語の中に入っている外来語の研究などをした上で、大辞典の作成に献身した。

彼は、ペルシャのシーラーズに生まれ、まずイラクへ行き、次いで、ダマスカスへ移り、*Taqī ad-dīn as-subkī* に師事した。その後、インド、メッカ、イエーメンなど各地を旅行し、イエーメンでは、主任法官になり、ここからしばしばメッカやメデナへ旅行した。彼は、この数度にわたるヒジャース地方への旅行で、多くの資料を集め、60巻（一説には100巻）におよぶ大辞典を完成したといわれる。これの抄本を残しており、*alqāmūs al-muḥīṭ* (取り巻く大海) という名で知られている辞典である。これは、紗本とは言え、*Al-jawhari* の *aṣ-ṣiḥāḥ* と、*Ibn manzūr* の *lisān al-'arab* に匹敵する重要な辞典である。H1272(1856)ブーラック版4冊本がある。

△ *Muḥammad murtaḍā az-zabīdī* (1205/1790~1) は、*Firūzābādī* の *al-qāmūs al-muḥīṭ* を改訂した。*Az-zabīdī* は、南アラビアからカイロへ移住し、ここで、幅広い活動を行った。特に伝承学者としての地位が高かく、彼の権威は、学者はもちろん、諸侯を引きつけるに足るものであった。経済的にも恵まれ、生涯研究に打ち込んだ。

その主著は、*Tāj al-'arūs min jawāhir al-qāmūs* (大海の宝石による花嫁の王冠) という10巻からなる辞典である。またヨーロッパでは *Lane* の *lexicon* の底本となるなど評価は高い。この中には先行学者の所説が多く紹介されている。

尚、彼は、Al-ghazālī 又は、Al-ghazzālīの iḥyā 'ulūm ad-dīn（宗教学の復活）の解説を行い、iṭḥāf as-sādat al-muttaqīn（敬神の君主の贈物）という題名で、発表している。

△ Jalāl ad-dīn as-suyūṭī (911/1505～6) をここに入れるのは、適当ではないかも知れない。彼を単なるアラビア語学者とするには、あまりにも多岐な文学活動を行っており、アラブにおける代表的な多作家である。彼は、ペルシャ人を父とし、トルコ人を母として、エジプトの asyūṭ に生れた。

彼は、カイロの多くのモスクで教えるようになるが、自惚が強よく、多くの敵を作った。著作は、約300種あると自ら書いているが、それ以後のものも含めると 500又は600種に達するといわれる。

彼が第一に熱中したのは、神学、特にコーランの研究、伝承学、法学であったが、スーフィズムにも関心を示した。第二は、言語学、修辞学、アダブ文学、第三は、歴史である。

彼の著作には、独創性は、あまりなく、ほとんど先行学者の所説を紹介しているものにすぎない。それにしても、古い著作の失われている今日、彼の著作は、何かと至便である。

主要なものをあげると、神学関係で、まず al-itqān fī 'ulūm al-qur'ān（コーラン学の解明）ṭabaqāt al-mufasssīrīn（コーラン注釈学者列伝）Tafsīr Al-jalālayn（二人の Jalāl によるタフシール、彼の師 Jalāl ad-dīn al-maḥallī との共著）などがある。

言語学に関するものでは、Al-muzhir fī 'ulūm al-lughā（言語学明解）³⁹⁾、lubb al-lubāb fī taḥrīr al-ansāb（血統学精粹）があり、後者は、名前の正しい使用法に関する研究書である。

al-iqtirāḥ fī 'ilm usūl an-naḥw wa-jadalu（文法学の原理と論義に関する提言）、al-ashbah wa an-nazā'ir（類似語と対応語）⁴⁰⁾ など、かなり有名なものである。

又、歴史に関するものでは、badā'i' az-zuhūr wa-waqā'i' ad-duḥūr（花の驚異と時代の出来事）、ta'rikh al khulafā'（カリフ伝）、ḥusn al-muḥādara fī akhbār miṣr wa-al-qāhira（エジプトおよびカイロの年代記に関する美しい講義）、ash-shamārikh fī 'ilm at-ta'rikh（歴史学に関するナツメヤシの花序）などがある。

bughya al-wu'āt fī ṭabaqāt an-naḥwiyyīn wa-al-lughawiyyīn（文法学者および辞書学者列伝）⁴¹⁾ および、nazm al-'iqyām fī a'yān al-a'yān（重要人物に関する金細工）は、貴重な資料を我々に提供している。前者は、本稿をまとめる上でしばしば用いたが、後者は、9/15世紀の人物伝である。

又、彼は、Ibn hishām の mughnī al-labīb の例証解説 sharḥ shawāhid mughnī al-labīb および文法書 ham'al-hawāmi' sharḥ jam' al-jawāmi' (jam' al-jawāmi' 解説) ⁴²⁾ というすぐれたテキストを著わした。

以上のような辞書学研究成果は、バイルートの“辞書学派”によって、近代にそのまま引きつがれている。

例えば、Buṭrus al-bustānī (1300/1882～3) による Muḥiṭ al-muḥiṭ（大海の大海）というす

ぐれた二巻ものの辞書は、Al-firūzābādī の al-qāmūs al-muḥiṭ の語彙を、単にヨーロッパ式のアルファベット順に書き直したものにすぎない。

又、Luwī ma'lūf による辞書 al-munjid⁴³⁾ も、このような辞書学の歴史の上に完成したものである。これ等バイルートのキリスト教徒の手になる辞書は、Buṭrus al-bustānī をはじめとして、単語の第一語根をアルファベット順に整理するというヨーロッパ的な方法を採用し、al-munjid にみられるように、厳密な語根による区分、説明の簡略化に成功している。

- (注) 1) Aṣ-ṣirāfi : akhbār an-naḥwiyyin al-baṣriyyin (カイロ初版) Muḥammad al-mun'im および Tā hā muḥammad 校訂, 序文 P7—8。
- 2) H285/898, バスラ学派を代表した学者、著書に kitāb al-kāmil (W. Wright, Leipzig, 1864—1892。カイロ版は、H1308 2巻本がある) がある。文法学では、Sibawayh の al-kitāb を基礎に論理と修辭をを駆使した。
- 3) H291/903—4, クーファ学派を代表した文法学者。kitāb al-faṣīḥ (J. Barth, Leipzig 1876), kitāb qawā'id al-shi'r (C. Schiaparelli, Actes VIII^e congrès Inter, des Orientalistes, Leyden, 1890) などの著書がある。
- 4) クーファに生まれ、バグダッドで成長、著書に 'adab al-kātib および 'uyūn al-akhbār 等がある。
- 5) Ibn an-nadīm : al-fihrist (カイロ イスティカーマ版) P121以下に「両派を混合した」文法学者の紹介がある。
- 6) As-suyūṭī : bughya al-wu'āt (Muḥammad 'abu al-faḍl ibrahīm 校訂 (1965) II—P180—81。
- 7) バグダッドのムサンナーで、オフセット版が出ているが、ヨーロッパでは、H. Derenbourg, Paris I 1881 II 1889 がある。
- 8) 筆者は注1) のカイロ版を参照しているが、F. Krenkow, Alger, 1936 がある。
- 9) bughya I—P529。
- 10) al-fihrist : khālawayh の項。
- 11) (A D916—964), Al-mutanabbī, Abū firās. 哲学者の Al-fārābī などは、彼の被護のもとに活躍し、Abu al-faraj al-iṣbahānī は、「歌の書 kitāb al-aghānī」を彼に献上した。
- 12) 'abd ar-rḥīm maḥmūd の校訂 (1941) になるカイロ版がある。
- 13) bughya I—P497。
- 14) (A D936—983) イスファハーンに生まれ、バグダッドで死亡、ブーヤ朝のサルタン。ケルマーンやオマーンを征服し、ワーシトでトルコ族を破り、バグダッドに入った。イラク、シルジャーン、タバリスターンを支配し、カリフは、彼に Shāhinshā の称号を贈った。
- 15) bughya II—P180—81。
- 16) 同上
- 17) 同上, II, P132。
- 18) Muḥammad 'alī an-najjār, 1952, 1955, 1956, カイロ版がある。
- 19) Mustafā as-saqqā', Ibrāhīm Mustafā, Muḥammad az-zazāf, 'Abd allāh amīn が1954年から刊行を進

めている。

- 20) Ibrāhīm mustafā, 'Abd allāh amin, 3 巻1960年カイロ版がある。
- 21) G. Hoberg の訳注 Leipzig 1885年がある。
- 22) 1926年カイロで4巻物として刊行されている。
- 23) Ign Guidi, Rome, 1890. 24) bughya I—449.
- 25) J. P. Broch. Christiania, 1879.
- 26) G. Jahn 2 巻, Leipzig 1882, 1886. 尚, カイロ版 (al-muniriyya 版) も便利である。
- 27) 各所で, 出版された。イスタンブール H 1310. Būlāg 版 H 1299. Téhéran H1271, 1275, Lucknow A D1882。
- 28) Muḥammad nūr al-ḥasan, Muḥammad az-zafzāf, Muḥammad muḥyi ad-dīn 'abd al-ḥamid, カイロ 4 巻, 1358/1939。
- 29) (イ) S. de Sacy, l'Alfiyya ou la quintessence de la grammaire arabe, Paris 1833. 又, この内 8 章を Anthologie Gr., Paris, 1829. に訳出している。
(ロ) A. Goguyer : da Alfīyah d'Ibn Mālik Beyrouth, 1888. フランス語の訳及び注。尚, Goguyer は, Ibn Mālik の Lāmiyyah も訳している。
(ハ) Errico Vitto, Ebn Mālik, L'Alfiyah. 訳, 注 Beyrouth, 1898. 尚, カイロ版 1306, 1307版 1888 などもある。
- 30) Dieterici, Leipzig, 1851, 仏語による注, Berlin 1852, ドイツ語訳。Būlaq 版1252, カイロ版1306, Beyrouth 版1872などがあるが, Muḥammad Muḥyi ad-dīn 'abd al-ḥamid 2 巻1951はすぐれている。
- 31) Muḥammad muḥyi ad-dīn 'abd al-ḥamid が, 校訂 2 巻ものとして出版している。
- 32) Muḥammad muḥyi ad-dīn 'abd al-ḥamid の校訂がすぐれている。カイロ1951。
- 33) 尚, この二著に加え, Qaṭr an-nada wa bull aṣ-ṣadā という文法書を書いているが, A. Goguyer による訳がある。La pluie de rosée, étanchement de la soif Traité syntaxe par Ibnu Hishām, Leyde, 1887. 34) bughya II—P 69。
- 35) H174/790。文法学の父 Sibawayh の師である。
- 36) アラビア語最初の辞典。'ayn の項からはじまるので kitab al-'ayn とよばれている。'Abd allāh darwish 校訂で刊行がすすめられている。尚, 辞書学史に関しては, John A. Haywood. Arabic Lexicography, Leiden, 1665. Darwish, al-ma'ājim al-'arabiya, Cairo 1656. などすぐれた研究資料がある。
- 37) bughya I—P 447. Ahmad 'abd al-ghaffār 'attār 1556. 1658. 6巻。
- 38) 同上 II—P 143。ブーラック版。H. 1316-1321. 17部。
- 39) Muḥammad aḥmad jār al-mawla bēk, 'Alī Muḥammad al-bajāwī, Muhammad abu al-faḍl ibrāhīm 等によってカイロで出版されている。尚, Fischer は, Z. D. M. G. vol. 59, 1900, p. 548—554 で, Muzhir か Mizhar かについて論じている。
- 40) Haiderabad H1360, 1360, 1361 4 巻。
- 41) (注6) 参照。本稿では, これを資料に活用した。
- 42) カイロ H1327 2 巻。
- 43) 初版は1908年出版された。現在第 5 版が出版されている。